

インダス川上流・チラス地域の仏塔岩画とその図像について —パキスタン・カイバルパクトゥン州の岩画の調査^(註1)—

報告：服部等作

1. はじめに

ヒマラヤの南麓一帯のインド西北部からパキスタン南部へ流れるインダス川上流の一帯は、インドと中央アジアをむすぶ古道沿いの岩や崖に紀元前後から九世紀頃の線刻岩画^(註2)や磨崖彫刻がのこる。岩画が制作された背景は、遊牧民族、巡礼者、交易人が旅の安全祈願や成就を表現したもので、人、仏塔、仏像、記号を主題に制作活動した。このなかに特徴的な岩画は、仏教が信仰を集めた時代に仏塔と仏像が蓮華で組み合わせた化生(化現)の表現がある。本稿は、パキスタン側カイバルパクトゥン州のインダス川上流域の古道沿いの岩画から仏塔から仏像が化生する図を調査したノートから一端を述べる^(註2)。

2. インダス川上流の岩画環境

地図 1 にインダス川上流域で岩画がのこる一帯を示す。ヒマラヤ山脈の西南麓沿いを流れるインダス川にカラコルム、ヒンズークシ山脈の渓谷のギルギット川とフンザ川が流入する合流点から下流の地域である。[地図 1]

この地の古道沿いに残る岩画は、ユーラシア大陸の西のローマと東の中央・西アジア、中国を、また南北軸でインドの文化が古代シルクロードの十字路としてむすばれていた証拠である。実際に中国僧の巡礼僧たちは、この地の一端を経由しインド入りを果たした。代表的な旅行記録が法顕(337—422 年)の「仏国記」に

「ここから健駄邏国までを北天竺である。始めてその境に入ると、一小国があり、隋歴国という」記録がある^(註3)。法顕が訪れた隋歴国について現在のギルギット渓谷の古道沿いの小村に金色の寺院が栄えたとするこの地の信仰について伝承内容の調査がある^(註4)。また玄奘(602—664 年)の『大唐西域記』^(註5)、慧超『往五天竺行記』^(註6)にこの地に七世紀頃に侵入した突厥系民族エフタル人に接触した紀行文がのこる。

近年この地域一帯の経済発展にともない自然環境と人為的な破壊が岩画などの文化財喪失が急速に進んでいる。

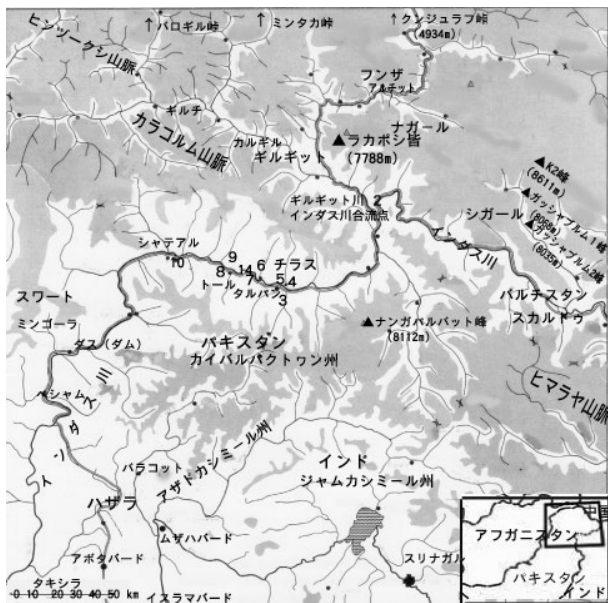
自然環境による破壊は、夏の高湿雨期—乾期の乾燥、冬の積雪と凍結、昼一夜の寒暖差と年間を通じ過酷な気象が繰り返される。その岩に線刻した岩画の影響は、岩の表面を黒く光る光沢(desert varnish)で覆うと同時に岩画の風化と古艶(patina)が進み、表面の剥落が著しい。さらに人為的な環境破壊が 1980 年代半ばのカラコルム山岳道路の開通、そして今世紀にはいり大規模な水力ダム開発が進み、渓谷と川沿いの古代からの旧道に通行車輛が増大し、年間を通じ断続的に岩の転落・土砂崩れ、洪水とともに岩の落書き、岩画の盗掘が横行し岩画をはじめ古道が消滅するなか民家、宗教建築が影響をうけ地域一帯の古い文化の維持が困難な状況にある。

2.1. ギルギットの地勢と岩画調査のねらい

特徴的な仏塔や仏像の岩画は、インド側のインダス川からパキスタン側のスカルドウ、バルチスタン、ギルギットへのインダス川沿いの古い巡礼路や交易路に分布する^(註6)。

当地での岩画調査にある問題点は、現在インダス川上流でパキスタンとインド両国の曖昧な国境線が係争中にあり両国の研究者に困難がつきまとうが日本は第三国の立場から調査が可能である。しかし現地での岩画調査の問題点は、1) 岩画が崩落や埋没し接近できない。2) 岩画の表現面積に反比例し高密度に描かれた図像、ならびに 3) 無秩序な加筆が岩画の解題を困難にする。すなわち岩の上下や左右に無秩序な図像が追加されていてもその主題の解明がむづかしい。また図像は(動物、記号、仏教美術のモチーフ)、碑文(カロシティー、バクトリア、ブラフミー、チベット、ソグド文字、漢文)、製作者(インドからイラン中央アジアの民族、チベット、漢族など)など多様である。

さらに岩画の図像は、岩場の条件から製作上の届く範囲に限られ、前述の主題と追加内容の判断が難しい。そのため岩画の記録は、スケッチ、写真撮影、ならびに拓本で記録した。拓本の採拓は、岩の風化による表面と浅い彫刻で拓本そのものが困難があり、加えて岩の放射熱から湿式の採拓作業が難航し制限があった。



1. シャティアル 2. ディアミール・パシヤダム 3. トール
4. ホダー 5. タルパン 6. ナウブラ 7. セレハラ
8. ハイデルキシュ 9. マンサール 10. チャフド 11. サリング
調査は、赤太線に示した

[地図 1] インダス川沿いギルギット—チラスの岩画調査地

3. 仏塔の岩画

3.1 仏塔と岩画

仏塔（卒塔婆）は、仏教開祖者の釈尊（釈迦牟尼仏陀）が入寂し荼毘の後、八分配した舍利（遺骨）を納めた簡単な墳墓から始まった。仏塔は、次第にその荘厳（装飾美化）を重ねインドで初期の仏教美術として踏み出した^(註7)。以下、仏塔の発展を述べ、次に岩画に表現された仏塔の特異性をあげる。

図 1.1 にサンチー第一仏塔と周囲の奉献塔を示す。図 1.2 に伽藍配置と構成要素の名称を示す。[図 1.1、図 1.2]

第一仏塔（紀元前一世紀、マウリヤ朝）は、直径約 37m の円形基壇と、高さ約 16.5m で初期・第一段階の仏塔^(註8)である。円形基壇^{メデイ}の上は、半球状の伏鉢^{アンダ}と舍利を格納する平頭^{ハルニカ}、さらに草や雨を防ぐ小形の傘蓋^{チャトラ}をつけ、仏塔の第一段階の特徴がわかる^(註9)。伏鉢頂頭部に当初の蓮弁の彩色痕を遺す伏鉢と仏塔の一、二段目の円形基壇の周りを僧侶や信者の時計回りで右邊ができる回廊がつく。仏塔外縁は、樹木や牛の侵入防止に一重の欄楯^{ベディカ}をめぐらし欄楯と塔門^{トアラ}をつけ、その装飾に釈尊を象徴する図像、生前の逸話の仏伝図ならびに仏像登場以前の象徴的な本上図を表現する。

第一仏塔以前に建造された第二塔の欄楯の装飾は、蓮華と様々な文様が組合わさり、さらにアショカ王法勅柱と獅子、釈迦を菩提樹で象徴するなど仏像なき表現のもとで祠堂、僧堂が配置される。

図 1.3 にベンドゥーサ石窟寺院内の仏塔を示す^(註10-2)。インド中部の石窟寺院内部に穿たれた仏塔は、前二世紀から一世紀にかけて仏像なき象徴表現し、サンチーやパールフト仏塔と同じ第一段階の形態である。[図 1.3]

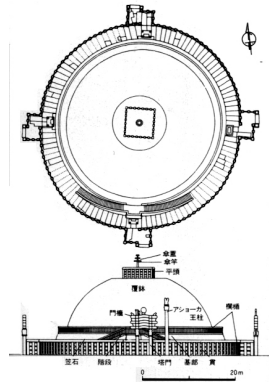
図 1.4 に岩画の仏塔に仏像なき表現の図像を示す。インダス川沿いチラスの岩画の仏塔（左図）は、図 1.2 と同じく伏鉢に蓮弁ないし花綱の模様をもつが簡略化されている^(註10)。仏塔右図）は、二段の基壇（円形）に階段をつけ伏鉢につづく。共に灯明をかざす厚い外套とブーツ姿の僧侶が回廊式の基壇を表現するが欄楯、塔門が変化し、第二段階への移行期の仏塔の岩画となる。

図 2.1 に第二段階の仏塔と礼拝場面を示す^(註11)。[図 2.1]

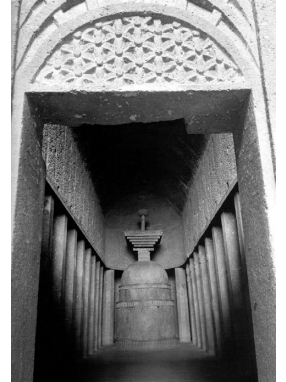
仏塔の第二段階^(註9)は、ガンダーラの仏塔の荘厳が方形基壇と仏龕—仏像がつく形式へと変化している。図の基壇上の二段円筒状の下側を欄楯がとりまき、上側の伏鉢下を華綱、頂頭部を蓮弁模様が飾る。平頭上の傘蓋がインドのそれと比べ大きい。右側から左側に右邊する剃髪の僧侶を先頭に合掌する比丘尼、信者二人が動画風に表現する。上側に一部損傷するターバンを被る眷属が頭光背をつけ、花蕾をもつ。この仏塔の浮き彫りは、北西インドに興ったガンダーラ仏教美術を担ったイラン系出自のクシャン美術とインドへのシルクロード交易を担ったギリシャ・ローマ美術の影響をみせる。クシャン朝は、東の漢、西のローマの両大国の間にあつて、ゾロアスター信仰者に関わらずインドの仏教から中央アジア



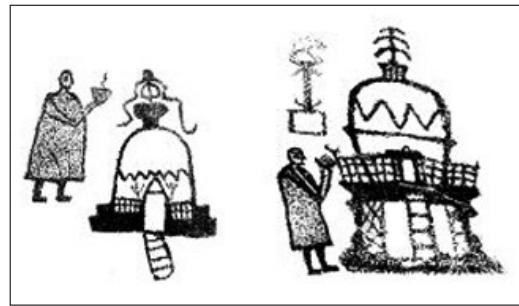
[図 1.1] サンチー第一仏塔^(註14-1)



[図 1.2] サンチー第一仏塔平面図／側面図^(註14-1)



[図 1.3] 塔院仏塔—ベンドゥーサ石窟^(註10-13)



[図 1.4] 岩画の仏塔—仏像なき荘嚴の図像^(註6-1)



[図 2.1] 方形基壇をもつ仏塔と右邊する信者の礼拝（大英博物館蔵 OA-1902.1002.29）

ア、各地の信仰を理解し通商路の権益と国際協調を図った。特にカニシカ王治世の二世紀半頃は、マツウーラとガンダーラで仏像製作^(註12)が始まる。仏陀の姿が仏塔と仏龕に組み込まれ建築と一体化、および仏龕の仏像の一体的荘厳により有力信者の右遷礼拝活動がすすんだ。仏塔は、より垂直と上方指向で山間地向けに省スペース化を図りつつ天への高みをめざした。パルティアのヘレニズム美術と建築がクシャン朝で合流し階段を付け回廊も重層式回廊と多層式仏塔へ、仏教から密教化へと変化する。

一方インドの仏塔は、二世紀半ば以降も仏教が北-南伝する各地で仏像なき象徴表現と仏像による表現が共存した。南インドのナーガルジュナコンダ^(註9.2)の仏塔は、仏塔伏鉢の浮き彫りに仏像なき象徴表現を蓮華、華綱で荘厳し、アマラバティー仏塔^(註13)は、欄楯の装飾に仏像なき象徴表現と様々な仏像を華綱でむすぶが平行して表現する。

図 2.2 に四重傘蓋と仏像龕をもつアジャンタ第 19 窟尖塔形仏塔を示す^(註14.1)。中部インドのアジャンタ石窟は、初期の九、十窟内部の仏塔が仏像なき象徴表現をする一方で、後期二十六窟内の仏塔やエローラ石窟十窟で大龕前面に仏像をつけた視覚的強化がすすむ^(註14.3)。[図 2.2]

インド以外で仏像なき象徴表現と仏像をもつ仏塔例がある。クシャン朝のもと中央アジア・ソグドディアナに至る經由地となるインダス川南部の下流沿いシンド地方からインダス川上流北部に至るギルギット、バルチスタン地域の岩画^(註10.15)、スワート^(註16)、アフガニスタン・ワハン溪谷の岩画と広域に及んでいる^(註17)。

スワートでブトカラの大塔は、紀元前の時代から円形基壇の増拡張を数回重ね、大塔周囲の奉献小塔の基壇の浮き彫りに象徴表現と仏像を表現する時期があり、後にチベット密教に貢献した蓮華生^{パドマサンパバ}の聖地となるまで盛えた^(註17)。

3.2 仏塔岩画の特異な荘厳

図 3.1 に岩画の仏塔と仏陀の蓮華座の特異な荘厳例を示す。

岩画は、三段にわたる。下段にもとの仏塔の細い線描の岩画、中段に四つの仏塔が不規則にならぶ。右から二番目の蓮華上の釈尊座像の表現は、通肩の衣に胸前で禅定印をとるが下段の元来の円形基壇の上の円筒状の伏鉢部から伸びた茎から生じている。下段の当初の仏塔の彫りに後付けの構図が後代に穿った痕跡が推定できる。左から 3 番目の仏塔から後代に、また上段と中段の左側の仏塔の表現は、円形基壇のインド式仏塔である。中段左から 2 番目と右端の仏塔は、密教化した寺院の後期の形式で、傘蓋が天にむかう多重かつ尖塔化する仏塔をえがく。[図 3.1]

図 3.2 に仏塔と菩提樹下の仏陀蓮華座像を示す。[図 3.2]

チラス橋横の砂地に埋まる岩の仏塔岩画は、画面下側から伸びた蓮弁上に禅定印(不明瞭)をくみ仏陀が結跏趺坐する。衣文は平行の筋状で通肩である。背後に光背のように菩提樹を描き、釈尊が悟をひらいた成道の場面とみられる。右側に音楽神のキン



[図 2.2] 仏像龕をもつアジャンタ第 19 窟尖塔形仏塔 (引用: 中村元: 図説仏教語大辞典, p.389 図 6)



上段: 仏塔 中段: 仏塔左から 1.2.3.4 下段: 仏塔の傘蓋
[図 3.1] 岩画の仏塔と仏陀の蓮華座 (撮影 2017 年 9 月チラスにて服部)



[図 3.2] 仏塔と菩提樹下の仏陀蓮華座像 (作図: 服部による)



[図 3.3] 尖塔多層形舍利容器 (註 22:pl.3.57b)

ナラあるいは天女・アプサラスの姿がある。菩提樹と仏塔の間に碑文があるが判読できない。釈尊の座像の上の仏塔は、仏龕がつくがその姿がない。階段がつく四層の方形基壇で、最下基壇が四柱、第二段が三柱で区画される。その上に二段の基壇をのせた上に龕をもつ半球状の伏鉢に平頭と傘蓋を重ねる。傘蓋は、六層におよぶ尖塔状で伏鉢からの支えをうけ幅がはたためく。上側の仏塔の空の仏龕と下側の仏座像が化生(化現)したように表現する。この作者(あるいは巡礼僧)が岩を前に仏を刻んだのである^(註18)。

阿弥陀の銘がつく仏像の例がインドに少例しかないが法華経は、釈尊の三昧による光明が生じた点を述べる。蓮華から化現し化仏が現れることを説く経典は、如来藏経にある、仏陀が禪定にはいり、その威力により多くの蓮華が出現し、みな化生すると説く。仏・菩薩に対する功德を説きつつ、三世十方の諸仏思想の展開と浄土世界の観想と仏名に関連した呪文的効果の要求を背景に岩画が制作されたのであろう^(註19)。本仏塔の岩画表現は、ブラフミーの碑文から6-7世紀頃の作とみられ、スワートにある8世紀頃の磨崖仏群^(註20)、カシミールの仏像と共通する仏塔がある^(註21)。

4. まとめ

南インドからインダス川上流沿いの北西インドのギルギット、フンザ、バルチスタン、スワート、ならびにカシミール地方(インド側も含め)は、インドと中央アジア、中国西域をむすぶ回廊部となって様々な支配者と美術表現が混交した。本稿でとりあげた仏塔を表現する岩画は、第一段階として仏陀の舍利をおさめ仏像が登場するより前の象徴としての仏塔、第二段階として仏像を加え仏像の登場後の仏塔の多様な表現がある。この両段階の仏塔の表現を比較すると、仏塔と一体化した仏像、あるいは仏塔から化生する仏像の登場が目に見える。仏陀が一度も足を踏み入れたことがないこの地域一帯は、インドの中央部と比べ仏伝図、本生図の表現に加えて岩画には仏塔の先端頂部から蓮華座の釈迦座像が生じる蓮華化生の図像が追加され仏陀の超人性を強調し、自己の犠牲が説かれる。この蓮華の中から身体が現われる化生は、「若生人天中、受勝妙楽。若在佛前、蓮華化生」と経典にも登場する^(註19-4)。岩画の図像は、蓮華化生する表現と信仰の多様な様相とその展開は紙面から次回の検討としたい。

5. 謝辞

本調査は、現地の建築調査で菅澤茂氏、M.Usman Mardanvi氏、Dr.Ashraf Khan-Quaid-i-Azam Univ., Dr.Nadaullah Sehrai-Pesawar Univ.Museum,ならびに、現地遺跡・文化財管理関係者から各種のご協力いただいた。本稿で感謝を申しあげます。

6. 註と参考文献

註1. 本研究は、科学研究費補助金による。研究題名は「ヒマ

ラヤをめくり展開された密教工芸の造形と表現の研究」基盤(B) 番号26300017、研究代表・服部等作、研究分担者4名、現地で調査した博物館、大学研究者と研究交流した。2017年度調査は、9月19日イスラマバードスカルドゥヘ(空路)、スカルドゥ(陸路) - チラス、バルチスタン、ギルギット(アラム,チラス,タルファン,ホダール,オシバット,カルギル) - (シャティアルースワート間の入境制限でスワートの美術調査を中止) - チラサブバザル峠 - 経由でバーラマI - タキシラ遺跡 - ベンジャワール - イスラマバード - 10月1日帰国。

- 註2. 岩画の呼称はRockcaving、Petroglyph、岩画彫刻とも呼ぶ。調査地域の岩画は、金属工具を用い深さ数ミリ程で線状に岩石や碑文を浅く打刻で穿つペッキングと呼ぶ描画方法である。
- 註3. 法顕,楊銜之(著),長沢和俊(訳) - 1971『法顕傳・宋雲行紀』,東洋文庫,194,平凡社、庵歴(陀歴と同じ、庵が陀の俗字)インダス川上流チラス Chilas ~ Kotgala Gaiah 間の右岸、特に Gaiah 付近が古代の Darel に比定。pp.161 - 216、『宋雲行紀』は進入したエフタルの遊牧民習俗、の内容を唯一の記述がある。
- 註4. 土谷遥子 - 2010:『法顕傳に見える陀歴仏教寺院』、オリエント53-1,pp.120-143、オリエント学会、ダレル渓谷のブツ村古老から検証の聞き取り記録である。
- 註5. 玄奘,水谷真成(訳) - 昭45:『大唐西域記』中国古典文学体系22,平凡社
- 註6. Jettmar,Karl - 2002:Between Gandhara and the Silk Roads,Rockcaving along the Karakorum Highway,1) p.17,Philipp von Zabern、及び Hauptman, H. - 2005:Pre-Islamic Heritage in the Northern Areas of Pakistan.1) Fig.21,-
- 註7. 中村元、他 - 昭和48年:浄土三部経・下『阿弥陀経』pp.76-77,仏塔の荘嚴は、一世紀頃に編纂された阿弥陀経典、法華経典に欄楯の石垣と他にも七重のターラ樹、金銀銅青玉、水晶、真珠、瑪瑙、琥珀など七種の宝石が荘嚴すると説く。
- 註8. John Marshall & Alfred Foucher - 1922:The Monuments of Sanchi,3 Vols, reprint, Agam Kala Prakashan, Delhi, India,
- 註9. Frants - 1965:Heinrich Gerhard Franz Buddhistische Kunst Indiens.VEB E.A.Seemann, Leipzig,
- 註10. 中村元、奈良康明、佐藤良純 - 2000:『ブッダの世界』、1) 図4.63、2) 図2.19、3) 図4.66、など学習研究社
- 註11. 大英博物館蔵 Inv.OA.1902.1002.29,のスワート出土とされる浮き彫り、ガンダーラの仏塔の大部分は、盗掘や埋没

- 化で造営当初の仏塔の大部分が消滅している。この異時同時表現は、西方からの影響を示唆し、燃燈仏授記などの仏伝図に表現されている。
- 註 12. 高田修—2004 :『仏教説話の美術』、pp. 120-134、学術文庫 1635、講談社、仏像の誕生は、クシヤン朝カニシカ王(紀元 100 - 125 年)の時代とされる。伝承上の最初の仏像がインド・コーサンビーのウダヤナ王(優填、于闐王)は、釈迦在世中に仏教を保護した伝説の王である。仏教東漸のなか日本では京都・嵯峨清涼寺の釈迦立像は、ウダヤナ王勅命の像を模刻したと伝わる。
- 註 13. Knox Robert — 1992 : *Amaravati-Buddhist sculpture from the great Stupa*, British Museum Press, 象徴的表現と仏像表現の混在表現がみられる。
- 註 14. 中村元—昭和 63 :『佛教語大辞典』、1) 図 1.p.388、2) 図 2.p.388、東京書籍
- 註 15. Ashraf Khan M — 2016 : *Survey and Documentation in Gilgit-Baltistan, Part II, Treat to the Cultural Heritage of Pakistan*, Taxila Institute of Asian Civilisation, Quaid-i-Azam Univ. Pakistan, p.231-258.
- 註 16. D.Taddei.M., — 1964 : *Sculptures from the sacred area of Butkara I- Swat, W. Pakistan, Reports and memoirs Part 2, Part 3*, Roma Istituto Poligrafico dello Stato, 1962-1964. ブトカラ大塔は、初期の墳墓風からインド式の円形基壇へと四度の増拡張をかかさね、浮き彫りに無仏像と仏像表現の二形式が重層的に出土している。
- 註 17. 奥山直司訳、Snelgrove, D., Richardson, H., 著—2003 :『チベット文化史』、春秋社、pp.88-116
- 註 18. 塚本啓祥 -2001:『インダス上流の刻画・刻文の特色とその歴史的意義』、印度學佛教學研究、第 50 卷、第 1 号、平成 13 年 12 月、碑文は、大乘經典の華嚴經、法華經、無量壽經、金光明經等で、時代はほぼ 6 から 9 世紀頃である。
- 註 19. 浄土經典・阿弥陀經が説く蓮池の浄土を表現した図像は、浄土図に現れる。法隆寺の伝橋夫人念持仏の阿弥陀三尊像が蓮池涌現式浄土世界の立体的表現をもつ。蓮華化生は、1) 母胎や卵を経ずに超自然的に突然生まれること(四生の一)をさす。仏・菩薩または天界の衆生の類。2) 阿弥陀の浄土に往生する事。3) 仏・菩薩が衆生を救済するために人の姿をかり現れる事。類形語の化現は、釈尊や菩薩が、現実世界で惑い苦しむ生きとし生けるモノの救済のため、様々な形をとり現実の世界に現れること。4) 蓮華の中から身体が現われることを坂本幸男、岩本裕—1967 :『法華經』(中) 堤婆達多品第十二、参照。
- 註 20. Anna Filigenzi — 2015 : *Art and Landscape: Buddhist Rock Sculptures of Late Antique Swat/Uddiyana*, Published by Austrian Academy of Sciences Press
- 註 21. P.Pal—1975 : *Bronzes of Kashmir*, Akademische, Druck—u.Verlagsanstalt, Graz, Austria, 1) pl.72、Fig.81,
- 註 22. David Jongeward; Elizabeth Errington; Richard Salomon — 2012 ; *Gandharan Buddhist Reliquaries, Early Buddhist Manuscripts Project*, Seattle, USA, pl.3.57b PeshawarMuseum3229